

花のき村と盗人たち

新美 南吉

一

むかし、花のき村に、五人組の盗人がやってきました。

それは、若竹が、あちこちの空に、かぼそく、うい
ういしい緑色の芽をのぼしている初夏のひるで、松林
では松蟬が、ジイジイジイと鳴いていました。

盗人たちは、北から川にそつてやつてきました。花
のき村の入口のあたりは、すかんぽやうまごやしの生
えた緑の野原で、子どもや牛が遊んでおりました。こ
れだけをみても、この村が平和な村であることが、盗
人たちにはわかりました。そして、こんな村には、お
金やいい着物を持った家があるにちがいないと、もう

喜んだのでありました。

川は藪の下を流れ、そこにかかっている一つの水車
をゴトンゴトンとまわして、村の奥深くはいつていき
ました。

藪のところまでくると、盗人のうちのかしらが、い
いました。

「それでは、わしはこの藪のかげで待っているから、
おまえらは、村のなかへはいっていつて様子を見てこ
い。なにぶん、おまえらは盗人になったばかりだから、
へまをしないように気をつけるんだぞ。金のありそう
な家を見たら、その家のどの窓がやぶれそうか、そ
この家に犬がいるかどうか、よつくしらべるのだぞ。
いいか釜右工門。」

「へえ。」

と釜右工門が答えました。これは昨日まで旅あるきの
釜師で、釜や茶釜をつくっていたのでありました。

「いいか、海老之丞。」

「へえ。」

と海老之丞が答えました。これは昨日まで錠前屋で、

家々の倉や長持などの錠をつくっていたのでありません。

「いいか角兵エ。」

「へえ。」

とまだ少年の角兵エが答えました。これは越後からきた角兵エ獅子で、昨日までは、家々の鬨の外で、さか立ちしたり、とんぼがえりをうったりして、一文二文の銭をもらっていたのでありました。

「いいか鮑太郎。」

「へえ。」

と鮑太郎が答えました。これは、江戸からきた大工の息子で、昨日までは諸国のお寺や神社の門などのつくりをみてまわり、大工の修業していたのでありました。

「さあ、みんな、いけ。わしは親方だから、ここで一服すいながらまっている。」

そこで盗人の弟子たちが、釜右エ門は釜師のふりをし、海老之丞は錠前屋のふりをし、角兵エは獅子まいのように笛をヒヤラヒヤラ鳴らし、鮑太郎は大工のふりをして、花のき村にはいりこんでいきました。

かしらは弟子どもがいつてしまうと、どつかと川ばたの草の上に腰をおろし、弟子どもに話したとおり、たばこをスツパ、スツパとすいながら、盗人のような顔つきをしていました。これは、ずっとまえから火つけや盗人をしてきたほんとうの盗人でありました。

「わしも昨日までは、ひとりぼっちの盗人であったが、今日は、はじめて盗人の親方というものになってしまった。だが、親方になってみると、これはなかなかいいもんだわい。仕事は弟子どもがしてくるから、こうしてねころんで待っておればいいわけである。」とかしらは、することがないので、そんなつまらないひとりごとをいつてみたりしていました。

やがて弟子の釜右エ門がもどってきました。

「おかしら、おかしら。」

かしらは、ぴよこんとあざみの花のそばから体を起こしました。

「えいくそツ、びっくりした。おかしらなどとよぶんじゃねえ、魚の頭のように聞こえるじゃねえか。ただかしらといえ。」

盗人になりたての弟子は、

「まことにあいすみません。」

とあやまりました。

「どうだ、村の中の様子は。」

とかしらがききました。

「へえ、すばらしいですよ、かしら。ありました、ありました。」

「何が。」

「大きい家がありましたね、その飯炊釜は、まず三斗ぐらいはたける大釜でした。あれはえらい銭になります。それから、お寺につつてあった鐘も、なかなか大きなもので、あれをつぶせば、まず茶釜が五十はできます。なあに、あっしの眼にくるいはありません。嘘だと思ふなら、あっしがつくつてみせましょう。」

「ばかばかしいことにいばるのはやめろ。」

とかしらは弟子をしっかりとつけました。

「きさまは、まだ釜師根性がぬけんからだめだ。そんな飯炊釜やつり鐘などばかりみてくるやつがあるか。

それになんだ、その手に持っている、穴のあいた鍋

は。」

「へえ、これは、その、ある家の前を通りますと、槇の木の生垣にこれがかけて干してありました。みるとこの、尻に穴があいていたのです。それをみたら、じぶんが盗人であることをついわすれてしまって、この鍋、二十文でなおしましょう、とそこのおかみさんにいってしまったのです。」

「なんとというまぬけだ。じぶんのしょうばいは盗人だということをしつかり肚にいれておらんから、そんなことだ。」

と、かしらはかしららしく、弟子に教えました。そして、

「もういっぺん、村にもぐりこんで、しっかりとみなおしてこい。」

と命じました。釜右エ門は、穴のあいた鍋をぶらんぶらんとふりながら、また村にはいっていきました。

こんどは海老之丞がもどってきました。

「かしら、この村はこりやだめですね。」

と海老之丞は力なくいきました。

「どうして。」

「どの倉にも、錠らしい錠は、ついておりません。」

子どもでもねじきれそうな錠が、ついておるだけです。あれじゃ、こつちのしようばいにやなりません。」

「こつちのしようばいというのはなんだ。」

「へえ、……錠前……屋。」

「きさまもまだ根性がかわっておらんツ。」

とかしらはどなりつけました。

「へえ、あいすみません。」

「そういう村こそ、こつちのしようばいになるじやないかッ。倉があつて、子どもでもねじきれそうな錠しかついでおらんというほど、こつちのしようばいに都合のよいことがあるか。まぬけめが。もういっぺん、みなおしてこい。」

「なるほどね。こういう村こそしようばいになるのですね。」

と海老之丞は、感心しながら、また村にはいっていきましました。

つぎにかえってきたのは、少年の角兵工でありまし

た。角兵工は、笛をふきながらきたので、まだ藪の向こうで姿のみえないうちから、わかりました。

「いつまで、ヒヤラヒヤラと鳴らしておるのか。盗人はなるべく音をたてぬようにしておるものだ。」

とかしらはしかりました。角兵工はふくのをやめました。

「それで、きさまは何をみてきたのか。」

「川についてどんどんいきましたら、花菖蒲を庭いちめんにかかせた小さい家がありました。」

「うん、それから？」

「その家の軒下に、頭の毛も眉毛もあごひげもまつしろなじいさんがいました。」

「うん、そのじいさんが、小判の入った壺でも縁の下にかくしていそうな様子だったか。」

「そのおじいさんが竹笛をふいておりました。ちよつとした、つまらない竹笛だが、とてもええ音がしておりました。あんな、ふしぎに美しい音ははじめてききました。おれがききとれていたら、じいさんはここにこしながら、三つ長い曲をきかしてくれました。おれ

は、お礼に、とんぼがえりを七へん、つづけざまにや
つてみせました。」

「やれやれだ。それから？」

「おれが、その笛はいい笛だといったら、笛竹の生え
ている竹藪たけやぶを教えてくださいました。その竹で作った笛
だそうです。それで、おじいさんの教えてくれた竹藪
へ行ってみました。ほんとうにええ笛竹が、何百すじ
も、すいすいと生えておりました。」

「むかし、竹の中から、金の光がさしたという話があ
るが、どうだ、小判こばんでも落ちていたか。」

「それから、また川をどんどんくだつていくと小さい
尼寺あまでいがありました。そこで花の撓たうがありました。お庭
にいっぱい人がいて、おれの笛ふえくらいの大きさのお
釈迦しやかさまに、あま茶の湯をかけておりました。おれも
いっぱいかけて、それからいっぱい飲ましてもらって
きました。茶わんがあるならかしらにも持ってきてあ
げましたのに。」

「やれやれ、何という罪のねえ盗人ぬすびとだ。そういう人ご
みの中では、人のふところや袂たもとに気をつけるものだ。

とんまめが、もういつペンきさまもやりなおしてこい。
その笛はここへおいていけ。」

角兵衛かくべえはしかられて、笛を草の中へおき、また村に
はいつていきました。

おしまいに帰ってきたのは鉦太郎かねたろうでした。

「きさまも、ろくなものはみてこなかつたろう。」
と、きかないさきから、かしらがいいました。

「いや、金持がありました、金持が。」

と鉦太郎は声はずませていいました。金持ときいて、
かしらはにこにこしました。

「おお、金持か。」

「金持です、金持です。すばらしいりっぱな家でし
た。」

「うむ。」

「その座敷ざしきの天井てんじょうときたら、さつま杉の一枚板まいいたなん
で、こんなのをみたら、うちの親父おやじはどんなに喜ぶか
も知れない、と思つて、あつしはみとれていました。」

「へっ、おもしろくもねえ。それで、その天井をはず
してでもくる気かい。」

鮑太郎は、じぶんが盗人の弟子であったことを思

い出しました。盗人の弟子としては、あまり気がきかなかったことがわかり、鮑太郎はバツのわるい顔をしてうつむいてしまいました。

そこで鮑太郎も、もういちどやりなおしに村にはいつていきました。

「やれやれだ。」

と、ひとりになったかしらは、草の中へあおむけにひっくりかえっていいました。

「盗人のかしらというのもあんがい楽しようばいではないで。」

二

とつぜん、

「ぬすとだッ。」

「ぬすとだッ。」

「そら、やっちまえッ。」

という、おおぜいの子どもの声がしました。子どもの

声でも、こういうことを聞いては、盗人としてびつくりしないわけにはいかないので、かしらはひよこんどとびあがりました。そして、川にとびこんで向こう岸へ逃げようか、藪の中にもぐりこんで、姿をくらまそうか、と、とつさのあいだに考えたのであります。しかし子どもたちは、縄切や、おもちゃの十手をふりまわしながら、あちらへ走っていきました。子どもたちは盗人ごっこをしていたのでした。

「なんだ、子どもたちの遊びごとか。」

とかしらははりあいぬけていいました。

「遊びごとにしても、盗人ごっこはよくない遊びだ。いまどきの子どもはろくなことをしなくなった。あれじゃ、さきが思いやられる。」

じぶんが盗人のくせに、かしらはそんなひとりごとをいいながら、また草の中にねころがろうとしたのであります。そのときうしろから、

「おじさん。」

と声をかけられました。ふりかえってみると、七歳くらいの子、かわいらしい男の子が牛の仔をつれて立って

いました。顔だちの品のいいところや、手足の白いところをみると、百姓の子どもとは思われません。

旦那衆の坊ちゃん、下男について野あそびにきて、下男にせがんで仔牛を持たせてもらったのかもしれない。だがおかしいのは、遠くへでもいく人のように、白い小さい足に、小さい草鞋をはいていることでした。

「この牛、持っていてね。」

かしらが何もいわないさきに、子どもはそういつて、ついとそばにきて、赤い手綱をかしらの手にあずけました。

かしらはそこで、何かいおうとして口をもぐもぐやりましたが、まだいい出さないうちに子どもは、あちらの子どもたちのあとを追って走って行ってしまいました。あの子どもたちの仲間になるために、この草鞋をはいた子どもはあとをもみずにいってしまいました。

ぼけんとしているあいだに牛の仔を持たされてしまったかしらは、くつくつと笑いながら牛の仔をみま

した。

たいてい牛の仔というものは、そこらをびよんぴよんはねまわって、持っているのがやっかいなものです。この牛の仔はまたたいそうおとなしく、ぬれたうるんだ大きな眼をしばたたきながら、かしらのそばに無心に立っているのです。

「くつくつくつ。」

とかしらは、笑いが腹の中からこみあげてくるのが、とまりませんでした。

「これで弟子たちに自慢ができるて。きさまたちがばかづらさげて、村の中をあるいているあいだに、わたしはもう牛の仔をいっぴきぬすんだ、といつて。」

そしてまた、くつくつくつと笑いました。あんまり笑ったので、こんどは涙が出てきました。

「ああ、おかしい。あんまり笑ったんで涙が出てきやがった。」

ところが、その涙が、流れて流れてとまらないのでありました。

「いや、はや、これはどうしたことだい、わしが涙を

流すなんて、これじゃ、まるでないてるのと同じじゃないか。」

そうです。ほんとうに、盗人ぬすびとのかしらははないのであります。——かしらは嬉うれしかったのです。じぶんはいままで、人から冷たい眼めでばかりみられてきました。じぶんが通ると、人びとはそら変なやつがきたといわんばかりに、窓まどをしめたり、すだれをおろしたりしました。じぶんが声をかけると、笑いながら話しあっていた人たちも、きゆうに仕事のことを思い出したように向こうをむいてしまうのであります。池の面おもてに浮かんでいる鯉こいでさえも、じぶんが岸に立つと、がばツと体をひるがえしてしずんでいくのであります。あるときさるまわしの背せなか中に負おわれているさるに、柿かきの実をくれてやったら、一口もたべずに地べたにすててしまいました。みんながじぶんをきらっていたのです。みんながじぶんを信用してはくれなかったのです。ところが、この草鞋わらじをはいた子どもは、盗人であるじぶんに牛の仔こをあずけてくれました。じぶんをいい人間であると思ってくれたのでした。またこの

仔牛も、じぶんをちつともいやがらず、おとなしくしております。じぶんが母牛でもあるかのように、そばにすりよっています。子どもも仔牛も、じぶんを信用しているのです。こんなことは、盗人ぬすびとのじぶんには、はじめてのことであります。人に信用されるというのは、なんとといううれしいことでありましょう。……

そこで、かしらはいま、美しい心になっているのであります。子どもころにはそういう心になったことがありましたが、あれから長いあいだ、わるいきたない心でずっといたのです。久しぶりでかしらは美しい心になりました。これはちようど、あかまみれのきかない着物を、きゆうに晴着はれぎにきせかえられたように、奇妙きみょうなぐあいでありました。

——かしらの眼めから涙なみだが流れてとまらないのはそういうわけなのでした。

やがて夕方になりました。松蟬まつせみは鳴きやみました。村からは白い夕もやがひっそりと流れだして、野の上のにひろがっていきました。子どもたちは遠くへいき、「もういいかい」「まあだだよ」という声が、ほかの

もの音とまじりあって、ききわけにくくなりました。

三

かしらは、もうあの子どもが帰ってくるじぶんだと思つて待っていました。あの子どもがきたら、「おいしよ。」と、盗人と思われぬよう、こころよく仔牛をかえしてやろう、と考えていました。

だが、子どもたちの声は、村の中へ消えていってしまいました。草鞋の子どもは帰ってきませんでした。村の上にかかっていた月が、かがみ職人のみがいばかりの鏡のように、ひかりはじめました。あちらの森でふくろうが、二声ずつくぎつて鳴きはじめました。仔牛はお腹がすいてきたのか、からだをかしらにすりよせました。

「だって、しようがねえよ。わしからは乳は出ねえよ。」

そういつてかしらは、仔牛のぶちの背中をなでていました。まだ眼から涙が出ていました。

そこへ四人の弟子がいつしよに帰ってきました。

「かしら、ただいまもどりました。おや、この仔牛はどうしたのですか。ははア、やつぱりかしらはただの盗人じゃない。おれたちが村をさぐりにいつていたあいだに、もうひと仕事しちやつたのだね。」

釜右エ門が仔牛をみていいました。かしらは涙にぬれた顔をみられまいとして横をむいたまま、

「うむ、そういつてきさまたちに自慢しようと思つていたんだが、じつはそうじゃねえのだ。これにはわけがあるのだ。」

といいました。

「おや、かしら、涙……じゃございせんか。」

と海老之丞が声を落としてききました。

「この、涙てものは、出はじめると出るもんだな。」
といつて、かしらは袖で眼をこすりました。

「かしら、喜んでくだせえ、こんどこそは、おれたち四人、すっかり盗人根性になつてさぐつてまいりました。釜右エ門は金の茶釜のある家を五軒みとどけま

すし、海老之丞は、五つの土蔵の錠をよくしらべて、曲がった釘一本であけられることをたしかめますし、大工のあつしは、この鋸でなんなく切れる家尻を五つみてきましたし、角兵衛は角兵衛でまた、足駄ばきでとびこえられる塀を五つみてきました。かしら、おれたちはほめていただきとうございます。」

と鉋太郎が意気こんでいきました。しかしかしらは、それに答えないで、

「わしはこの仔牛をあずけられたのだ。ところが、いまだに、とりにこないのよわつているところだ。すまねえが、おまえら、手わけして、あずけていった子どもをさがしてくれねえか。」

「かしら、あずかった仔牛をかえすのですか。」

と釜右エ門が、のみこめないような顔でいきました。

「そうだ。」

「盗人でもそんなことをするのでござえますか。」

「それにはわけがあるのだ。これだけはかえすのだ。」

「かしら、もつとしつかり盗人根性になってくださいませよ。」

と鉋太郎がいきました。

かしらは苦笑いしながら、弟子たちにわけをこまかく話してきかせました。わけをきいてみれば、みんなにはかしらの心持がよくわかりました。

そこで弟子たちは、こんどは子どもをさがしに行くことになりました。

「草鞋をはいた、かわいらしい、七つぐれえの男坊主なんですね。」

とねんをおして、四人の弟子はちつていきました。かしらも、もうじつとしておれなくて、仔牛をひきながら、さがしにいきました。

月のあかりに、野茨とうつぎの白い花がほのかにみえている村の夜を、五人のおとなの盗人が、一匹きの仔牛をひきながら、子どもをさがして歩いていくのでありました。

かくれんぼのつづきで、まだあの子どもがどこかにかくれているかもしれないというので、盗人たちは、みみずの鳴いている辻堂の縁の下や柿の木の上や、物置の中や、いいにおいのするみかんの木のかげをさが

してみたのでした。人にきいてもみたのでした。

しかし、ついにあの子どもはみあたりませんでした。百姓ひやくしやうたちはちょうちに火を入れてきて、仔牛をてらしてみたのですが、こんな仔牛はこのあたりではみたことがないというのでした。

「かしら、こりや夜つびてさがしてもむだらしい、もうよしまししょう。」

と海老之丞えびのじやうがくたびれたように、道ばたの石に腰こしをおろしていいました。

「いや、どうしてもさがし出して、あの子どもにかえしたいのだ。」

とかしらはききませんでした。

「もう、てだてがありませんよ。ただひとつのこつているてだては、村役人のところへうったえることだが、かしらもまさかあそこへはいきたくないでしょう。」
と釜右エ門かまへもんが言いました。村役人というのは、いまだいえば駐在巡査ちゆうざいじゆんさのようなものであります。

「うむ、そうか。」

とかしらは考えこみました。そしてしばらく仔牛こうしの頭

をなでていましたが、やがて、

「じゃ、そこへいこう。」

といいました。そしてもう歩きだしました。弟子でしたちはびっくりしましたが、ついていくよりしかたがありませんでした。

たずねて村役人の家へいくと、あらわれたのは、鼻の先に落ちかかるように眼鏡めがねをかけた老人でしたので、盗人ぬすびとたちはまず安心しました。これなら、いざというときに、つきとばしてにげてしまえばいいと思っただからであります。

かしらが、子どものことを話して、

「わしら、その子どもを見失って困っております。」
といいました。

老人は五人の顔をみまわして、

「いつこう、このあたりでみうけぬ人ばかりだが、どちらからまいった。」

とききました。

「わしら、江戸から西の方へいくものです。」

「まさか盗人ぬすびとではあるまいの。」

「いや、とんでもない。わしらはみな旅の職人です。釜師や大工や錠前屋などです。」

とかしらはあわてていいました。

「うむ、いや、変なことをいってすまなかった。お前たちは盗人ではない。盗人が物をかえすわけがないので。盗人なら、物をあずかれば、これさいわいとくすねていってしまはずだ。いや、せっかくよい心で、そうしてとどけにきたのを、変なことを申してすまなかった。いや、わしは役目から、人を疑うくせになつていてるのじゃ。人をみさえすれば、こいつ、かたじやないか、すりじやないかと思うようなわけさ。ま、わるく思わないでくれ。」

と老人はいいわけをしてあやまりました。そして、仔牛はあずかっておくことにして、下男に物置の方へつれていかせました。

「旅で、みなさんおつかれじやろ、わしはいまいい酒をひとびん西の館の太郎どんからもらったので、月をみながら縁側でやろうとしていたのじゃ。いいところへみなさんこられた。ひとつつきあいなされ。」

ひとのよい老人はそういって、五人の盗人を縁側につれていきました。

そこで酒をのみはじめましたが、五人の盗人とひとりの村役人はすっかり、くつろいで、十年もまえからの知りあいのように、ゆかいに笑ったり話したりしたのでありました。

するとまた、盗人のかしらはじぶんの眼が涙をこぼしていることに気がつきました。それをみた老人の役人は、

「おまえさんはなき上戸とみえる。わしは笑い上戸で、ないている人をみるとよけい笑えてくる。どうかわるく思わんでくだされや、笑うから。」
といて、口をあけて笑うのでした。

「いや、この、涙というやつは、まことにとめどなく出るものだね。」

とかしらは、眼をしばたきながらいいました。

それから五人の盗人は、お礼をいって村役人の家を出ました。

門を出て、柿の木のそばまでくると、何か思い出し

たように、かしらが立ちどまりました。

「かしら、何かわすれものでもしましたか。」

と鮑太郎かんたろうがききました。

「うむ、わすれもんがある。おまえらも、いっしょに
もういっぺんこい。」

と行って、かしらは弟子でしをつれて、また役人の家には
いっていきました。

「ご老人。」

とかしらは縁側えんがわに手をついていいました。

「なんだね、しんみりと。なき上戸じょうごのおくの手が出る
かな。ははは。」

と老人は笑いました。

「わしらはじつは盗人ぬすびとです。わしがかしらでこれらは
弟子でしです。」

それをきくと老人は眼めをまるくしました。

「いや、びつくりなさるのはごもつともです。わしは
こんなことを白状はくじょうするつもりじゃありませんでした。

しかしご老人が心のよいお方で、わしらをまっとうな
人間のように信じていてくださるのをみては、わしは

もうご老人をあざむいていることができなくなりま
した。」

そう言つて盗人のかしらはいままでしてきたわる
いことをみな白状はくじょうしてしまいました。そしておしま
い、

「だが、これらは、昨日きのうわしの弟子でしになったばかりで、
まだ何もわるいことはしておりません。お慈悲じじで、ど
うぞ、これらだけはゆるしてやってください。」
といいました。

つぎの朝、花のき村から、釜師かましと錠前屋じようまえやと大工かくと角
兵工べえ獅子じしとが、それぞれべつの方へ出ていきました。

四人はうつむきがちに、歩いていきました。かれらは
かしらのことを考えていました。よいかしらであった
と思つておりました。よいかしらだから、最後にかし
らが「盗人ぬすびとにはもうけつしてなるな。」といったこと
ばを、守らなければならぬと思つておりました。

角兵工かくべえは川のふちの草の中から笛ふえをひろつてヒヤ
ラヒヤラと鳴らしていきました。

四

こうして五人の盗人は、改心したのでしたが、そのもとになったあの子どもはいつたいたれだったのでしょうか。花のき村の人びとは、村を盗人の難からすくってくれた、その子どもをさがしてみたのですが、けつきよくわからなくて、ついには、こういうことにきまりました、——それは、土橋のたもとにむかしからある小さい地藏さんだろ。草鞋をはいていたというのがしようこである。なぜなら、どういわけか、この地藏さんには村人たちがよく草鞋をあげるので、ちようどその日も新しい小さい草鞋が地藏さんの足もとにあげられてあったのである。——というのでした。

地藏さんが草鞋をはいて歩いたというのはふしぎなことですが、世の中にはこれくらいふしぎはあってもよいと思われます。それに、これはもうむかしのことなのですから、どうだって、いいわけです。でもこれがもしほんとうだったとすれば、花のき村の人び

とがみな心のよい人びとだったので、地藏さんが盗人からすくってくれたのです。そうならば、また、村というものは、心のよい人びとが住まねばならぬということにもなるのであります。

「花のき村と盗人たち」

※底本 新装版 新美南吉童話集3 『花のき村と盗人たち』（2012年・大日本図書）

※このテキストを個人的に読む以外の利用をされる場合には、新美南吉記念館までご連絡ください。
(TEL : 0569-26-4888)